実践レポート

産・学連携による地域の特色を生かした授業づくりについて
～地域から愛される学校づくりの実践～

香川県立農業経営高等学校
教 諭　　川 崎　　博 功

1　はじめに

本校は 4 学科１２部門で構成された四国で唯一の文部科学省指定の農業経営者育成高等学校である。現在、全校生徒数は男子 172 名、女子 107 名の計 279 名である。私の所属する農業生産科は果樹・作物・野菜の３部門から構成され、香川県の育成品種であるイチゴ「さぬき姫」やアスパラガス「さぬきのめざめ」など多くの品目を授業や実習を通して学んでいる。しかし、普段の何気ない会話でよく「どうせ農経やし」「どうせやってもできんし」など否定的な言葉が多く出ることに衝撃を受けた。本校には自己肯定感が低く、何事にも自信がなく消極的な生徒や、失敗を恐れて挑戦すらしない生徒が多く見られる。これはこれまでの生活の中で、褒められた経験が少なく、失敗したことに対して周りからの目を気にしていることが原因ではないかと考えられる。そのような生徒たちではあるが、一人一人が他者より優れた能力を持っており、その良さを出し切れていないのである。そこで、農業の授業に企業（農家）との連携を取り入れ、地域の農業に関する問題や課題に耳を傾け、高校生として（高校生だから）できることを見つけ出し、生徒たちの主体的・対話的で深い学びを目指して授業内容を検討し、生徒一人一人が意欲的に学び、実践する授業ができるようにすることを課題として実践した。

2　実践の内容・方法

（１）生徒の意識改革

野菜部門の目標としては､「香川県オリジナルブランド野菜の普及および地域の企業（農家）の持つ課題に一緒になって取り組み、高校生として社会に役立つこと」としている。このことを踏まえ、生徒たちの自己肯定感を高める取組の第一歩として地域の課題を調査し､「高校生だからできること」について生徒と共に考え、解決に向けた計画を立てた。

課題解決への実践では、それぞれ得意な分野の役割を与え、自分たちの実施内容を活動記録簿としてまとめさせ、実践した内容の整理や写真での記録、自己評価など様々な視点から評価し、指導者のコメントをつけてアドバイスしている。生徒は、日々の積み重ねの記録が成果に繋がることを実感することで積極的に活動を行うようになった。

〈活動記録簿〉

（２）企業との連携（共同研究）

「持続可能な農業」をテーマに「乳酸菌」や「ケイ酸水溶液」の可能性について共同研究を行っている。消費者目線では、無農薬や減農薬など人体への影響を気にしている方が多いことから、農薬や化学肥料に代わる資材を検討し、調査・研究を行っている。

生徒は、企業の方と実験内容や調査方法の打ち合わせをすることで、日ごろ学習していることの知識・技術を確認したり、コミュニケーション能力を向上させたりすることができる。また、企業の方に成果を報告する際には、調査結果をまとめ、わかりやすく資料を作るといった普段の授業では学べないようなことを実践することができる。最近では、本校の取組に賛同していただける企業が増え、生徒たちが活躍できる場が多くなってきた。

〈研究内容の打ち合わせの様子〉

〈現場での打ち合わせの様子〉

（３）地域の方への情報発信

企業との共同研究から生まれた、農経オリジナル商品を地域の方にＰＲする場を設けた。イチゴの県オリジナル品種「さぬき姫」に乳酸菌を散布し、「乳酸菌イチゴ」として地域の方へ販売実習を行った。また、全体の１～２割程度発生する規格外果の利用法についても検討を行い、豊浜ＳＡでのスムージーの販売やインパクトのあるイチゴワインの製造を行い、７月にはさぬきワイナリーにて販売イベントを開催した。このような活動がマスコミに多く取り上げられ、多くの生徒が取材を受けることができた。

〈イチゴワイン完成の様子〉

〈イチゴワイン販売イベントの様子〉

３　実践の成果

（１）生徒の変容

現在、県内外５社と共同での研究や商品開発及び製造・販売を行っている。生徒たちの研究活動が、マスコミに多く取り上げられたことで、研究や商品開発に関する

問い合わせや視察の依頼をいただくようになった。また、農業クラブのプロジェクト発表に出場し、２年連続で県大会最優秀賞を受賞し、四国大会への出場権を獲得した。それらの活動によって、自分たちの活動に自信を持つことができ、これまで消極的だった生徒たちも積極的に取り組むようになった。１つの活動を行う上でも、様々な役割があり、自分の長所を最大限生かせるように献身的に活動を行っている。放課後や早朝にも農場に足を運び、管理作業やデータの収集など、自分たちでやるべきことを考えて行動できるようになっている。本校では、２年生の１０月頃より専攻分野に分かれ学習を行っているが、３年生から２年生へ技術や調査方法などの引継ぎが行われ、主体的に行動する力が大いに身に付いたと思われる。

〈日本学校農業クラブ四国大会〉

〈イチゴ生育調査の様子〉

（２）地域との関係の変化

これまでも、品質のよい農産物を地域の方に安く販売する活動は行われていたが、地域の農業を牽引して地元農家や企業に貢献するまでには至っていなかった。本校での様々な取組をホームページやＳＮＳを通して発信することで、企業や農家からの知識や技術指導の協力依頼が来るようになった。昨年度は、本校のメロン栽培をホームページで知っていただき、高松市のＯＡシャープ株式会社様が新規事業でメロンの水耕栽培に挑戦するということで、技術指導の依頼があったので、イチゴ栽培で実施していたケイ酸水溶液を用いた栽培方法を提案し、共同研究を行った。収穫後、「高等級の割合が高く大変成果が出た」と喜んでいただいた。地域の方から頼りにされ、地域の農業を牽引していく学校になりつつあると感じている。また、昨年度は綾川町立羽床小学校、今年度は綾川町立滝宮小学校の児童が地域農業学習のために来校した。その際に、本校生徒が先生役となり、イチゴ栽培について、分かりやすく説明し、高評価を得るとともに感謝された。生徒は学んだ成果を発揮できる機会が増えており、自分に自信が持てるようになり、自ら学び自ら考え、判断して行動できるように成長している。

〈小学校とのいちご狩り交流の様子〉

〈イチゴに関するクイズ大会の様子〉

〈企業連携　水耕栽培メロン共同研究〉

４　普及させたい取組と期待される効果

企業連携やイベントの企画など積極的な取組を他校にも普及させたい。企業連携は学校の教員以外の大人と直接関わることで、コミュニケーション能力の向上や自己肯定感を高めるうえで大変効果的である。また、高校生の活動に積極的に関わっていただける企業を募集したい。協力いただける企業が増えることで、様々な分野から生徒の活躍の場が生まれる。この取組は農業分野に限らず、どのような分野でも活用することが可能である。それぞれの地域や関連する産業が抱える問題を高校生とのマッチングを行うことで、それぞれの学校や企業、地域が元気になると思われる。また、地元の子どもたちとの交流も大変有効ではないかと考える。単に交流するのではなく、子どもたちにいかにわかりやすく、楽しさを伝えながら学んでもらうかについて工夫する必要がある。生徒が活動を行う際には、役割分担を行い、得意なことを担当させることで、責任感や意欲の向上に繋がると考える。

５　課題及び今後の取組の方向

これまでの活動で満足するのではなく、広い視野を持って、様々な視点から地域に貢献できるように積極的に活動を行っていきたい。「高校生だからできること」を自分たちで主体的に考え、計画・実行していけるように支援しつつ、地域貢献できる人材の育成に努めたい。現時点での問題点は数カ所の企業との共同研究や製造・販売を行うことで、充実した表情の生徒が多い一方で、あまりにも多くの活動を同時に進行することは難しく、日々の活動に追われて、生徒自身が目標を見失ってしまわないかと心配しており活動内容の精選をしていく必要があると考えている。そしてこれまで以上に、自分自身の役割を１つ１つ丁寧にやり遂げ、地域社会に貢献できる人材へと成長してもらいたいと思っている。

今後も、生徒一人一人の長所を最大限に生かせる環境づくりを行いながら、学校や地域の発展に貢献していく意欲的な人材を育成し続けることが私の一生の仕事であると決意を新たにしている。